

吉田松陰。言葉の力

幕末、長州萩に生まれ、「松下村塾」を主宰した吉田松陰。

若者たちを教えた期間は、わずか2年10カ月にすぎません。

そんな短期間ながら松下村塾からは高杉晋作をはじめとする志士や、初代内閣総理大臣となる伊藤博文、

日本大学の学祖・山田顕義など、後に活躍する人物を数多く輩出しました。

若者たちに大きな影響を与えた松陰とはどんな人物だったのか。松陰の言葉を通して見つめます。

文:網野ゆかり

心が動く
きっかけは、
旅することで
得られる

この言葉の原文は「発動の機
は周遊の益なり」——。嘉永3年
(1850)松陰21歳のとき、九州
を巡った初めての旅の日記に記
された言葉です。

松陰はよく旅をした人でした。その旅とは今、何をすべきか
に直結するもの。松陰はこの旅
で、アヘン戦争などの本に出会い、洋式砲術やオランダ船を目の
当たりにし、欧米列強の脅威
を知ります。

見聞し、行動することこそ大
事だと実感した松陰。旅で“発
動”した心は、松陰をさらなる行
動へと驅り立っていくことになり
ました。

私の計画は
しばしば
つまずく。
しかし、志は
ますます盛んだ

前へ前へと突き進み続けた松
陰。その人生は実は、つまずきの
連続でもありました。「私の計画
は…」の言葉は嘉永5年(1852)、
東北への旅日記に記されたもの
で、松陰が藩から処罰されること
になったときの言葉です。

その前年、萩藩士だった松陰
は、遊学のため初めて江戸へ。
ところが遊学は1年を待たずに終わ
ります。それは友人の熊本藩士
宮部鼎蔵らと話す中、海防の現
状を知るために東北を旅する話
が持ち上がり、松陰も同意したこ
とに始まります。

藩の都合で通行手形の発行が
遅れ、出發日が迫る中、松陰が選
んだのは、友との約束。約束を破
れば信義にもとる。それこそ長州
の恥だ。そう考え、手形を持たぬ
まま出発を敢行したのです。

しかし、それは脱藩亡命の行
為。江戸に戻った松陰に下された

のが、即時帰国の命令でした。
そのとき松陰が日記に記した
のが「吾が計數々蹶けり、而して
志は則ち益々壯なり」。
つまずいても落ち込むことなく、かえって心を燃やした松陰。
その生き方は、その後何度も逆境
に陥っても変わることはありませ
んでいた。

万事の源は
志を立てる
ことから始まる

「万事の源は…」は松下村塾の
指針ともなった言葉で、松陰が人
間の在り方、武士としての生き方
を七カ条にまとめた「土規七則」
の最後に記した言葉です。

松陰は脱藩亡命の罪で謹慎
後、許されて、再び諸国を巡る旅
へ。その途中、黒船来航を知り、
下田で黒船に乗り込んでアメリ
カへ密航しようとして失敗しま
す。送り返された萩で投獄され、
獄から出た後も実家で幽囚。そ
のころから若者たちが教えを乞
いにやってくるようになり、安政



「吉田松陰自賛肖像(吉田家本)」(部分)山口県文書館蔵

ひじょうもく 飛耳長目

4年(1857)11月には幽囚室を
出て、敷地内の小屋を改修。そこ
を松下村塾として若者らと学ん
でいきます。

「万事の源は…」の原文は「志
を立てて以て萬事の源と為す。交
えらを擇びて以て仁義の行を輔く。書
を讀みて以て聖賢の訓を稽ふ」。

意訳すると次のような文になり
ます。「志を立てることが全ての
始まりである。友を得ることによ
つて仁義ある行動は支えられ、
書物を読むことによって聖人の教
えを参考にし、今の自分に生かし
ていくことが大切なのだ」——。

「松下村塾写真」
山口県文書館蔵
松下村塾の建物は保存され、現存
する。この写真は、玄関脇に明治
39年設立(昭和22年解散)の「松
陰神社維持会事務所」の看板が
あり、明治41年撮影の写真と似て
いることからも、明治末年頃の撮
影か。なお萩の松陰神社は明治
23年、松下村塾のすぐ隣に松陰を
祀る祠が建てられたのが始まり



志は平凡で
あっては
ならない。
百年は
一瞬である

松陰は安政6年(1859)、幕
府による「安政の大獄」で處
刑され、30歳で波乱の生涯を
閉じました。しかし、松陰の言
葉は塾生たちの中で生き続け
ます。

その一人が、10代半ばで入
塾した山田顕義。その入塾当時
を物語る次の逸話があります。まだ少年だった顕義が松
陰のところへ年始の挨拶に行
くと「この時勢に年始どころで
はない」と叱られてしまい、顕
義少年は松陰を補佐していた富
永有隣に「先生に謝ってくれ
ろ」と涙ぐんで頼んだ、という
のです。熱血漢でまっすぐな松
陰らしい逸話です。

松陰の死後、顕義は志士とし
て奔走。大村益次郎のもとで軍
人として頭角を現し、明治4年
(1871)には岩倉使節団に同行
して欧州へ。その視察で、軍備
よりも法律や教育の整備こそ
急務と痛感。やがて政治家へ
転身。日本初の司法大臣とな
り、さらに法曹界の人材育成の
ため、日本大学の創設などに関
わっていました。

そんな顕義が終生大事にし
ていたのが、土規七則と松陰か
ら贈られた扇。扇には「立志尚
特異(立志は特異を尚ぶ)」で始
まる、次のような意味の漢詩が
書かれていました。「志は平凡で
あってはならない。百年は一
瞬。無駄に禄を食んではなら
ない」。

平凡ではない道を果敢に前
進し続けた塾生たち。彼らの發
動の機は、生きる力にあふれた
松陰の言葉との出会いにありま
した。

- 【主な参考文献】
 ・松陰神社『松陰神社所蔵宝物図録』2009
 ・萩博物館編『松下村塾開塾150年記念 吉田松陰と塾生たち』2007
 ・萩博物館編『山田顕義と近代日本 生誕170年記念特別展』2014
 ・山口県教育会編『吉田松陰全集』2・6・9・10 1973
 ・山口県文書館編『山口県文書館所蔵アーカイブスガイド幕末維新編』2010